

序 言

この度、『東京都江戸東京博物館研究報告 第14号』が刊行のはこびとなりました。今回は、平成19年1月に行われたシンポジウム「江戸城研究の新視点」の特集号をおおくりいたします。江戸城をめぐる研究状況は近年大きく変わりつつあります。その背景のひとつには、織豊系城郭と江戸城の発掘調査が進んだことをうけて、従来ほとんど知ることができなかった徳川家康が築城した草創期の江戸城に関する分析が可能になってきたことがあげられます。こうした新しい研究状況を総括しようとしたのがシンポジウム第Ⅰ部「徳川家康・秀忠と江戸城 - 織豊城郭としての江戸城 -」です。これに対して、近年の都市史研究の展開をうけ、今までとりあげられてきた儀礼や政治の場としての江戸城ではなく、生活の場としての江戸城、そして消費の場としての江戸城、それらの実態を解明し、江戸城を都市史研究の一環に位置づけようとして開催されたのが、シンポジウム第Ⅱ部「江戸城の経営と消費」です。いずれも当館における日頃の調査研究活動とスタッフによる問題意識の研鑽から出発したという意味で、「新視点」を冠するに相応しいシンポジウムとなりました。このシンポジウムにおける研究成果を『研究報告』として刊行することは、江戸城研究の進展にとって少なからず貢献するものと考えます。本シンポジウムの成果が、ひとりでも多くの方々に活用され、いささかなりとも研究の発展に寄与できればと思います。

最後となりましたが、本号の刊行に際して論考をお寄せいただいた執筆者の方々に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

平成20年3月31日

東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室